

英語のオーラル・コミュニケーション能力を促進する教材を考える  
— 中学、高校の教科書を中心として —

植林 慧 (産能大)

オーラル・コミュニケーション能力を促進するためにはどうしたら良いか、英語教育上、重要な役割を持つと考えられる中、高等学校の教科書の主な構成（平成五年三月現在）と使用方法を中心にそれらの改善策について検討していきたい。具体的な提案を行なう前に、まず、どのような教科書がどのように使用されているのか、ここで簡単に見ていきたいと思う。

中、高等学校における英語教材の現状

中学校は義務教育なので、すべての授業で文部大臣による検定に合格した教科書を（主たる教材として）使用しなければならない。英語の場合、現在教科書は全部で六種類ある。（注1）それぞれの教科書の内容及び構成に大きな違いは見られないが、六種類の中からどの教科書を使用するかについての選択は教師個人にあるのではなく、学校単位か、あるいは地域ごとの「広域採択」という制度によって決められる。通常、公立校の場合は広域採択制が適用される。（注2）

高等学校の場合もはや義務教育ではなくなるので「広域採択制」は適用されなくなる。従って、授業の中心となる教科書はある程度教員が選ぶことが可能である。例えば文部省が設定しているカリキュラムコース、すなわち必修科目以外の選択コースについては検定教科書以外の教材を使用することができる。また必修、選択科目に限らず副教材は教師が自由に選び使用することができる。しかし実際授業で副教材を使用する時間的余裕はあまりないのが現状のようである。特に、複数の教員が担当する必修科目などは共通の試験問題を行なう場合が多いため、教科書のみを繰り返し教える結果に至るそうである。

教科書の内容構成と使用方法

教科書は、主に本文と文法事項を含んだ練習問題で構成されている。本文は各課のはじめに位置し、英語の対話文や物語から成り、練習問題は本文に出てきた文法、表現を中心とした応用問題、より正確には置き換え問題がその大半を占める。特に、中学校の教科書にこの傾向が強く、典型的なのが、例にならって、次の語句を使って、あるいは次の下線部をかえて、文を完成しなさいといった書き替え問題（substitution drills）である。では、次にこれらの教科書を使用して行なわれている授業がどのようなものなのかについて、日本の中学、高等学校で二年間AETとして授業を担当した経験をもつ Charles Jannuzi の論文 "Team-Teaching in the Mainstream (1)" から引用する。

"To be sure, there is one method that has come to predominate in many English classroom in Japan, although it most certainly is not the Grammar-Translation Method. It is best called the Reading Method (or Reading Approach). This method is 'in foreign language teaching, a programme or method in which reading comprehension is the main objective' (Richards, Platt, and Weber, 1985, p. 238). When

a foreign language is taught with this approach, ' (a) the foreign language is generally introduced through short passages written with simple vocabulary and structures (b) comprehension is taught through translation and grammar analysis (c) if the spoken language is taught, it is generally used to reinforce reading and limited to the oral reading of texts' (Richards et al., 1985, pp. 238-9). Anyone who has ever taught or been taught EFL in Japanese schools will recognize the method." (注3)

Jannuzi氏が指摘するように、日本の英語教育の基本はリーディング・メソッドであり、授業の主流は訳読であると考えられる。最近こういった認識を示す研究発表や論文が少なくない。その代表的なものの一つとして以下のようなものがある。

”いままで繰り返し、中学や高校の英語Ⅰ、Ⅱは総合英語であり、「リーディング」の指導だけを目標にしているわけではない、と言われてきた。しかし、相変わらずこれらの科目は「リーディング」の授業として扱われ、その内実も訳読が中心となっている。……はたして「リーディング」という名の訳読が英語授業の中心になっているこの現状から脱出して、本来の「総合英語」に進む道はないのだろうか。”(注4)

現在、わが国の英語教育に対する世論の批判の大半がこのような授業内容、すなわち、読解中心あるいは文法重視にある印象を強く受ける。その是非は別としても、現場の教師の中からも英語教育の姿勢そのものを諫める意見が頻繁に聞かれるようになっている現状に対して、何らかの適切な処置が必要であると考えられる。Jannuzi氏が言うように、必ずしもリーディング・メソッドに効力がないわけではないが、時代の流れとして、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする英語教育が求められている今日、教科書の基本的内容と構成を見直し、より目的に合った教材に改善することが望ましいと考える。そのためには”教科書の改作・簡易化のテクニック”の中で述べられているように”従来型英語教科書の基本的性格そのものが「改作」されなければならない。”のかも知れない。(注5) なぜなら、いわゆる読解中心と言われる授業に至る傾向と、使用されている教科書は決して無関係ではなく、教科書の基本的構成や内容が「リーディング・メソッド」に対応する様式を採用しているところに根本的な問題があると考えられるからである。われわれのほとんどは英語を学ぶ際すでに母国語を持っている。従って英文を見れば無意識的に日本語に訳すことを行なっているのである。文にわからない単語があれば英和辞典を引いて日本語でその意味を理解しようとする。つまり、本文を訳読するということは、基本的には英語を日本語に訳すという練習を行なっているにすぎない。英語を話す、あるいは英語でコミュニケーションを図るためには、英語を日本語に訳すという能力よりもむしろ日本語を英語にする能力が必要とされるのである。このふたつに共通する部分は多いが、要求される知識や能力は明らかに異なると思われる。

オーラル・コミュニケーション能力を促進する教材を考える

オーラル・コミュニケーション能力、あるいは英語を「話す」という能力を高めるためには、英語の総合能力を高めることが大事である。中でもとりわけ「書く」能力、すなわち和文英訳の能力を養成することが重要だと考える。それは、英語を話すためにはまず何よりも英語で文が作れなければならないからである。そのためには、無論英文法の知識が必要であることは言うまでもないが、これまでの英語そのものの構造を

主に理解するための英文法に留まらず、日本語の文（和文英訳）に積極的に応用するために役に立つものでなければならぬと考える。これまでの教科書での英文法の指導は主に英語の文を例にとって、あるいは読解や訳読（英文和訳）を通して行なわれてきた。しかし、本来英文は英文法に基づいて成り立っている訳であるから、そこには何の矛盾も問題も見られない。英文法はよく知っているのに英語が話せないといった現状に至るのもそのためである。本来、英語の難しさは英語とは異なった構造をもつ日本語に英文法の知識が必ずしもそのまま当てはまらないといった点にある。そこに多くの矛盾や問題があることは、実際われわれが英語を書いたり話そうとした時より具体的に知ることができるのである。従って英作文の練習はオーラル・コミュニケーション能力育成には不可欠である。英語を話す際必要な能力とは、結局、日本語を英語の文法にあてはめて考え文章を組み立てていくということである。そのためには、日本語文を中心に英文法を指導する方法もまた必要であると考え。同じ内容の日本語と英語の文を比べることによってその構造的違いを知ることは、和文英訳能力を高めるために大変効果があるに違いない。この点について以下の日本語文を例に更に考えていきたいと思う。

私は学生です。 (I am a student.)  
毎朝六時に起きて (I get up at six, and)  
六時半に朝食をとります。 (eat breakfast at six-thirty.)  
七時に家を出て、 (I leave home at seven, and)  
歩いて学校へいきます。 (walk to school.)

これらの日本語文と英文には構造上異なる点がいくつか見られる。まずはじめの「私は学生です」という日本語文には英語の冠詞、すなわち「一人の学生」を意味する a = one に対応する部分がない。仮に「私」という言葉が「私達」に変化したとしても（主語が複数形になっても）学生という言葉が複数形になることは日本語の場合はない。これが英語だと、主語の [I] が [We] になれば当然 [student] も [students] となり、主語の変化に伴い動詞も変わる。次の「毎朝六時に起きて」という日本語には英語の [I] に相当する（「私」という）主語がないが、日本語としてこの場合そのほうがより自然である。これを英語の文にする時、主語を省略するわけには文法上いかないので [I] という言葉を付け加える必要がある。「歩いて学校に行きます」という文は「行く」という日本語の動詞があるため [walk] を使うことはなかなか考えつけないことが多い。たぶん九割かそれ以上の人がこの文を見て [I go to school on foot.] と訳すのではないだろうか。この場合はそれでも正解だが、必ずしもこのやり方で自然な英文に成るとは限らない。事実、われわれの多くは日本語文の言葉一言一言をただ英語にそのまま訳すことで英文になると考えているようなところがある。従って、「車で仕事に行く」は [I go to work by car.] で、ほとんどの場合 [I drive to work.] と言えない。同様に、「飛行機で北海道へ行く」は [I am going to go to Hokkaido by plane.] で [I am going to fly to Hokkaido.] といった発想にはならない。この例からも解るように、日

本語文の動詞は常に英文でも動詞に置き換えられ、単なる言葉の置き換えだけが行なわれる傾向が見られる。本来英語と日本語は発想や構造が違う言語なのだからこのへんに特に留意して指導する必要があると考える。

では、これまで述べてきたことを既存の検定教科書に生かすにはどのようにしたら良いのかという点について、教科書の中でも使用部数の多い [NEW HORIZON] より（内容を元に）、中学一年と二年のモデル・レッスンをそれぞれ作成してみたので、ざっと目を通してもらいたい。

#### モデル・レッスン1（中学一年）

1. 由美： こんにちは、私の名前は岡田由美です。

マイク： やあ、こんにちは、僕の名前はマイク・デビスです。

私の名前は	～	（です）。	My name is	～	.
あなたの名前は	～	（です）。	Your name is	～	.
彼の名前は	～	（です）。	His name is	～	.
彼女の名前は	～	（です）。	Her name is	～	.
その（その）名前は	～	（です）。	Its name is	～	.

2. 由美： おはよう、マイク君。

マイク： おはよう、由美。

由美： マイク君、こちらは健君です。健君、こちらはマイク君です。

健： やあ、マイク君。

マイク： やあ、健。

こちらは	～	（です）。	This is	～	.
私は	～	（です）。	I am	～	.
あなたは	～	（です）。	You are	～	.
彼は	～	（です）。	He is	～	.
彼女は	～	（です）。	She is	～	.
それは	～	（です）。	It is	～	.

3. 本文（つぎの対話文を聞いて質問に答えなさい。）

4. 練習（英語で話そう）（注6）

#### モデルレッスン2（中学二年生）

1. 恵美： 昨年、東京にはどれくらいいたんですか。（How long were you in Tokyo last year?）

マイク： 一週間程です。（I was there for about a week.）

恵美： ご家族と一緒に。（Were you there with your family?）

マイク： はい。両親と姉は一緒でしたが、弟は一緒ではありませんでした。（Yes, I was. But my brother wasn't there with us.）

I am in Tokyo now.
I was in Tokyo last year.
Are you in Tokyo now?
Were you in Tokyo last year?

How long were you in Tokyo last year?

2. マイク： 日本人は桜の花が大好きですよ。(Japanese people like cherry blossoms very much.)

ポール： そうですか。(Really?)

マイク： きのうち、沢山の人が桜の下でピクニックをしていました。

(Many people were having a picnic under the cherry blossoms, yesterday.)

ポール： 桜の木はワシントンD. C.にもたくさんあります。

東京都が贈ってくれたんですよ。

(Washington D.C. also has a lot of cherry trees. They were a present from the city of Tokyo.)

マイク： 知っています。(Yes, I know.)

今日の新聞にその美しい写真が載っていました。

(There was a beautiful picture of them in today's paper.)

Many people are having a picnic now.

Many people were having a picnic last Sunday.

He is reading in the park now.

He was reading in the park yesterday morning.

3. 本文 (つぎの対話を聞いて質問に答えなさい。)

4. 練習 (英語で話そう) (注7)

これらに共通する指導要領を簡単に説明すると、まずはじめにその課で扱う重要な英文法の学習を行ない、次に本文、そして復習を兼ねて練習という順序である。英文法の指導は常に自然な日本語を用い和文と英文の両方を通して学習する。それらに構造的、あるいは内容的な違いがあれば十分説明を行なう。例えば、モデル・レッスン1ではBe動詞の単数、現在形を学習するが、ここに日本語の「～です」という表現がある。英語の「is」はよく日本語で「～は～です」と訳されるが、本来英語にはこの日本語の「～です」に相当する言葉はない。英語には日本語の女、男言葉に相当する表現はなく敬語もそれほど多く見られない。このような英語と日本語の感覚の違いに留意して指導することが英語のセンスを養うためには大事なことだと考える。また「～君」や「～さん」といった表現も英語にはぴったりするものがない。「Mr.」や「Mrs.」等の名字につくものはあるが、「～さん」と違い男女や既婚、未婚の区別を伴うものである。

モデル・レッスン2は1と比べ英語と日本語の構造にかなりの違いがでてくるため内容的に難しくなってくる。対話文1にある「一週間程です」や「ご家族と一緒に」のように、必ずしも日本語で「～しました」といった表現が過去時制になるのではないので気をつけたい。また、対話文2の4、5行目は英語と日本語文の主語や動詞に違いがあるが、それぞれが日本語らしい、英語らしい自然な文である。こういった違いに触れ、慣れること、そして学ぶことが特に必要であると考えられる。

本文は基本的に英文の対話文か物語であるが、従来と異なり(?)まず本文を読む前に聴くことを徹底させる。英語の正しい発音やリズム、イントネーションを知らずに

そのまま英文を読むということは、日本語読みの変な英語の発音を助長するだけでなく、リスニング・プラクティスそのものの効力を損なう可能性が強い。読解後すでに内容を知っているものを更に繰り返しテープで聴いてもリスニングの能力が伸びているのかどうかを計ることは難しい。もし内容を知らないテープを聴き続けるのであれば、その内容の理解度によってある程度進歩したかどうかは実感できるものである。いずれにしても聴いた内容の理解度をチェックするためにはそのテープスクリプトを読み、理解することが不可欠なので、まず聴いてから読むというのは非常に効率面でも良いと考える。

最後の練習では学生の学力に応じて英語の質疑応答や自由英作文のようなものを取り入れ、基本的に和文英訳の能力に直接役立つことを行なう。

#### 結語

一般的に日本人の多くは、英語の読み書きは良いが聴くことと話す能力が劣っていると感じている。確かに読解力についてはこの認識はある程度正しいのかも知れないが、「書く」ことに関しては、われわれもう少し客観的に見る必要がある。というも程度の差こそあれ、辞書と時間の余裕がなければ思っていることが表現できないといった状況が、日本人の多くが直面している現実だからである。そして、日本人にとってオーラル・コミュニケーションが困難であることは、この英語で文章がすぐに組み立てられないということに深く関わっていると考えられる。「書く」能力が劣っている原因の一つに文法力が不十分な点が挙げられる。それは、従来の読解や訳読式で得られる英文法の知識が常に英文を基本としているため、英語で文を書くため（和文英訳）に必要な、より実践的な知識や応用力を養うことに直接的にはならない、すなわちオーラル・コミュニケーションの即戦力につながらないと考えられるからである。英語と日本語の文章構造の基本的な違いに対応できる実践的な文法の知識や応用力を養うためには、どちらかというところ日本語文を基本に英文法を学ぶ必要があるのではないかと考える。最後にモデル・レッスンの構成であるが、便宜上従来の教科書とあまり大きく変えていない。文法指導に重要な日本語の対話文を本文とする考えもあるので、この点については今後更に検討していきたい。

#### 注・参考文献

注1) 中学英語教科書リスト(1993年度三月現在)

New Horizon	(東京書籍)
Sunshine	(開隆堂)
New Crown	(三省堂)
Total	(秀文出版)
One World	(教育出版)
Everyday	(中教出版)

注2) 若林俊輔:「広域採択制とは一体何なのか」, 現代英語教育 '92 七月号

注3) Jannuzi, C. 'Team-Teaching in the Mainstream(1)', 現代英語教育 '92, 四月号

注4) 新里眞男:「発話力につながるリーディング指導」, 英語教育 '91, 八月号

注5) 田中正道:「教科書の改作・簡易化のテクニック」, 現代英語教育 '92, 四月号

注6) Lesson 1 [みんな友達], New Horizon (1), 東京書籍

注7) Lesson 2 [Mike Was in Japan Last Year], New Horizon (2)